

街の観覧車

阿刀田 高



街の観覧車

阿刀田 高



文藝春秋

街の観覧車

1983年2月25日 第1刷

著 者 阿刀田 高

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23

電話 東京03(265)1211(代)

定 価 950円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

© Takashi Atohda 1983 Printed in Japan

街の観覧車・目次

うすあかり

恋の残り

拗ねた血

赤い音

梔子の便り

7

35

61

89

113

水ぬるむ

雲どり模様

小麦色の王妃

存在証明

雨を待つ女

あとがき

290 259 229 199 171 145

装幀 長尾みのる

街の観覧車

うすあかり

空と屋根との境界に観覧車が見えた。止まっているのか廻っているのか書斎の窓からはわからない。

私鉄沿線の古い住宅地。まだ高層ビルの数は少ない。この界限では星川二郎の住むアピタシオン・タチバナが一番背高のつぼだろう。十一階の出窓から街の鳥瞰図がほどよく覗えた。

眼下に冬枯れの枝に包まれた二百坪ほどの屋敷が見える。瓦屋根は剝けて斑の模様を描き、庭の手入れも行き届かない。敷石のようなものが見えるから昔は立派な家だったのだろうが、今は廃墟に近い。それでも時折洗濯物が干してあるところを見ると、だれかが住んではいるのだろう。その隣は瀟洒なコンクリート住宅。新しいビルと古い家屋とが並んで建っているのは、この街の滑稽な特徴だ。東京が広がるままに無計画に発達した町。フォルムも色彩もばらばらだ。しかも

この箱庭の中にはさまざまな階層が生きている。仕事に疲れて眺めていると飽きることがない。西側の、背の低いマンションにはどこかのクラブのママさんが住んでいる。化粧術の進歩をしてみじみと実感させてくれる美人。裸のまま部屋の中を闊歩しているという噂だが、星川はまだ見たことがない。蕎麦屋の店員の話では、なかなかグラマラスな体なのだそう。

その隣はベランダで犬を飼っている家。それから親子二人で毎朝ジョギングをやっている家。どういう仕事の人か知らないが、いつも机に向かったシルエットの映る窓がある。星川と同業者なのかもしれない。

星川の机も窓辺にある。部屋には本と雑誌の山。四分六分の割合で、英語の本と日本語の本が棚を分けあっている。机の上には電話、ペン皿、コーヒーマシン・カップ、携帯用テレビ、原稿用紙。彼は一日の大半をここで過ごす。三十九歳。大学講師。翻訳家。本来は地味な職業だが、一昨年翻訳したアメリカ風俗の内幕物がベストセラーとなり、にわかにマス・コミでもてはやされるようになった。彼自身苦笑せずにはいられないのだが、一見知的な風貌も大衆の人気を集めるのに役立ったらしい。テレビに出演したときには、主婦層の評判がとてよかったとか。

「馬鹿らしい」

思い出すたびにそう呟いてみる。自分自身に対する見栄のようなものが働く。われながらさほど嫌いな容姿ではないけれど。

教え子におだてられ、ほんの六カ月ほどテレビのワイド・ショウのキャスターを勤めた。あれは成功だったのかどうか。視聴率も横這い状態で、しかも星川のほうで厭気を覚えて罷（や）めてしまったが、部分的には愉快な体験がなくなかった。たとえば新しい人間関係。とりわけ繭子（まゆこ）のことが……。

——どうしているかな——

消息はしばらく途絶えている。女の白い笑顔をまん中に据えて想像が広がった。

星川には放心の癖がある。過去の出来事ととりとめもなく心に呼び戻して、いつまでも夢想を樂しむ。さながら子どもが泥をこねてさまざまな形を作り上げるように星川も思い出をこね廻す。過去は現実存在したものより一層鮮明なものとなって戻って来る。時には現実存在したものをはるかに越えて飛翔する。その変化のさまが楽しい。

脳裏にとてつもなく大きい観覧車のイメージが浮かぶことがある。そんなイメージを描くのは、やはりこのマンションに移って来て遠い遊園地の風景を望み見たせいだろう。ワゴンは星川を乗せ、天空を割って虹のように滑る。ゆったりとしたイマジネーションの中に、過ぎた日の風景が一つ一つ浮かびあがる。見知らぬ世界が映る。脳味噌の中のカレドスコープ。彼がいまだに自動車の免許を取らないのはこうした放心癖のせいだ。妻子を持つ身には剣呑である。

繭子は星川がテレビのキャスターをやっていたときのアシスタント役だった。アシスタントと言っても彼女のほうは本業である。フリーの「しゃべり屋さん」を集めているプロダクションがあつて、繭子はそこに所属する司会專業のタレントだった。

年齢は二十七歳と聞いた。郷里は博多で、今は妹と一緒に暮らしていると言っていた。そこそこ美しい二人姉妹の顔が浮かぶ。

繭子は右四十五度の表情が一番美しい。左四十五度でもわるくはないが、いずれにせよ正面からカメラに写すと、いくぶん顔が扁平になつてしまい、ノーブルな印象が失せてしまう。鼻梁の美しさも消えてしまう。女の顔について、こんな細かい觀賞法を覚えたのもテレビに出演したおかげかもしれない。

髪は豊かだった。眼と眼の間隔が少し離れていて、これが幼い印象を作り出す。頬の匂いが香ばしい。今でもふっと薫り立つほどに……。そのことを思うと追憶がたちまち二人だけの時間へと流れ出す。繭子を思うときにはこれを忘れることはない。これを楽しまないことはない。

眉間に漂う幼さは、愛のさなかにも変らなかった。産毛が震え、恥毛は髪にも増して黒い。女体は充分に成熟していたが、表情の幼さがいっさいを穏和なものへと転じてくれる。お伽の国の情事、そんな感触がなくなかった。

思い返してみると、繭子は磨りガラスの向こうを見るようにぼやけた部分の残る女だった。親しいような、親しくないような。

テレビの世界ではおたがいに愛称で呼びあっていて、ひどく親密みたいになっているけれど、その実、人間関係はそれほど濃くはない。番組が終ってしまうとちりぢりになってしまふ。十数年も続いている著名なショウ番組の司会者二人が私的にはコーヒーマーばかり一緒に飲んだこともないという事実を聞かされて、星川は「そんなものかな」と驚いたことがあった。

だから繭子の人となりが呑み込めないのもさほど不思議なことではないのかもしれない。毎週顔を合わせて親しげにしている、それはどこまでも仕事の中のこと。「おはようございます」から「お疲れさま」までの演技にしかすぎない。

だが――

と、星川は思う。

番組にはもう一人、スポンサーの商品を専属で紹介するアシスタント・ガールがいた。スタジオではみんなが「桃子、桃子」と呼んでいたけれど、星川は名前の呼び捨ては失礼のような気がして、たいていは「和田倉さん」と苗字のほうを言っていた。

仕事のうえでは繭子のほうがずっと近しいはずなのが、「人柄がよくわかる」ということなら桃子のほうがピンと来る。一方は体の関係まであった女だというのに、今でもそんな印象が残っているのはなぜだろう。それともお伽の国の情事を経たあとだから、かえって不可解に感ずるのだろうか。

「繭子さんは心を許さないから」

桃子もそう言っていたっけ。二人は同じプロダクションに属する同じタレント仲間だというのに……。

しかし、その桃子だって星川に本当によくわかっていたのかどうか怪しいものだ。ただ、桃子はもともと東京の人間だ。それだけでも星川にはわかりやすい。両親がスタジオを見学に来たこともある。卒業した短大も星川はよく知っている。大手の銀行に勤めたのち、

「お金の勘定ばかりじゃつまらないから」

と、おしゃべり業のオーディションを受けて、この道に入ったとか。そんな履歴も桃子を見るとすんなりと納得ができる。それでつい人柄までわかったつもりになってしまうのだろう。

その点、繭子はぼやけている。おしゃべりが仕事なのに、気がついてみると彼女は自分についていつも寡黙だった。

どこの学校を出たのだろう。

家族はどうなっているのだろう。

前歴はなにをしていたのか。病気をしたことがあると言っていたが、どこが悪かったのか。

記憶の糸を手繰ってみても思い出すものは少ない。たしかお母さんは実母ではなかった。妹さんはどこかの劇団に属していた。その妹さんをとともかわいがっていて……。妹さんにはずっと

年上の恋人がいて……その男には妻子があつて……しかし、これは繭子自身のことではない。過去になにほどの「暗い」部分があるのかもしれない。「暗い」と言うのは言い過ぎだろうが、他人に積極的に語りたくない事情が少しあるのだろう。表情はあどけなく、年齢よりずっと愛らしく見えたが、

——この人、案外苦勞しているな——
と、感じたことはあつた。

「男の人って、どんなもの贈られたらうれしいんですか」

カメラが他所をめぐっているときに、司会者の席で星川と繭子は私語を交わす。

モニター・テレビには男物の装身具が映っていた。桃子が気取った声で商品の紹介をしている。クリスマスに近い頃だった。

「ウーン、なんだろう？ なんでもうれしいけど……趣味の物は困るときもあるかな」

「ネクタイなんかかえって迷惑なんですか」

「趣味にあわないとね。ネクタイにあわせて背広を作らなくちゃいけない」

「ああ、それはとてもすてき……です」

「だれに贈るんだ？」

茶化し加減に尋ねれば、

「妹が……ちょっと」

と、生真面目な顔を作つてそらす。

——本当に妹の話かな——

あまり深く詮索をすることもあるまい。カメラの向いている先を眺めながら、

「今日の商品なら、バックスキンのベルトあたり。相当におしゃれの人でも数は持っていないし、あれ、擦れて傷みやすいものなんだ」

「そうですか」

本番のあとで繭子は星川の勧めどおりに紺色のバックスキンのベルトをスポンサーに交渉して買い求めている。地味なデザインの品だった。

「繭ちゃん、おじさまの恋人ができたのか」

カメラマンに尋ねられて、

「ううん、父に」

と、今度はまたべつなことを言っていたが、帰りがけに電話口で、

「バックスキンのベルト買っておいてあげたわよ。いいと思うわ」

妹さんに告げていたから、星川に言った言葉のほうが本当だったらしい。

赤電話はスタジオの外の、喫煙所の脇にあるので、ことさらに盗み聞きをするつもりがなくても自然に聞こえて来る。局員以外のタレントはたいいていこれを使う。私生活が零れ落ちる。いっ

だったか電話機を置いた繭子が首をすくめるようにして、

「馬鹿なことばかりやっていて」

と、眉をしかめていたが、あれも妹さんのことだったのか。星川の眼から見れば、まだ充分に若い繭子が、妹のことになるとたんに姉さんぶるのはおかしかった。

「なんだ？」

「泥鰌が鯉になっちゃって」

妹さんの恋愛がそうだと言うのだろう。星川がからかって、

「鯉が鯉になって」

と言え

「なんですか」

と尋ねる。

「コイはニンシンになりやすい」

「……………」

妹さんの色恋はともかく、あの頃は繭子と体を交えるような間柄になるとはとても考えていなかった。テレビ局とはそういうところなのか。男と女が簡単に結びついて……。どうしてあんなったのか、自分でもよくわからない。だからあの夜の追憶はいつも同じ会話から始まる。

「不思議だな」

「ええ」

ホテルの小部屋で星川が言い、繭子が頷いた。繭子の乳房は日本の女を感じさせる柔らかさだった。ベッドに横たわりながら、

「なぜ？」

と、星川が尋ねたが、繭子は答えない。問いかけの意味がすぐにはわからなかったのかもしれない。ややあって、

「もうすぐ終りですね」

と、呟く。

プロデューサーから番組の打切りが伝えられていた。星川が「なぜこうなったのかな？」と聞